

「私の話を誰も聞いてくれない！」

総園長 宮下 智

Kさんの明星学園への入所は、私が明星で仕事を始めることになった35、6年前よりさらに10年ほど前にさかのぼる。そして、それからの多くの時間は、彼女は私の直接の支援の担当ではないところでの暮らしたかったので、そのおつきあいは、時折すれ違う時に挨拶や話しをする程度のものだった。

彼女について知っていることはわずかだった。

「もう絶対にグループホームなんかに行かない」、イヤな思い出ばかりなのだろう、彼女は、地域移行の相談があるたびに強くそれを主張した。「全部自分でやれって言われた」、実は彼女の暮らしたグループホームは長野県で第1号として始まったあこがれのグループホームであるはずだったのだが、何年間か暮らしたことのある彼女の主張は、あこがれのグループホームとはまるでかけ離れた「強制的な自立訓練」の場所として強く刻印されていた。彼女にとっては、グループホームは「行きたかったグループホーム生活、地域生活ではなく、行かされたグループホーム生活」だったし、入所施設の暮らし以上に自分のことは自分ですという自立訓練がそこでは待っていたのだろう。

また、そのグループホーム生活に移る前には、職業訓練ということで、彼女は掃除と皿洗いに出かけていた。それも彼女にとってはイヤな思い出の一つで、朝晩、10kmほど歩いての通勤と叱られてばかりの掃除と皿洗いの話を何回もしてくれた。

その頃、彼女は情緒の浮き沈みが激しかった。体重がおそらく10kg単位で、上がったたり下がったりしていた。今思えば、おそらく躁鬱状態の繰り返しなのだろうが、遠くから見ている私にはその原因も、その支援内容もわからないままだった。しかし、おそらく、それが原因だったのだろう、彼女のグループホーム暮らしは途中で中止になっていた。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

彼女とおつきあいが次第に深まっていく10年ほど前から、だんだん彼女の姿が明確に焦点を結ぶようになっていく。

彼女は、もう70才手前である。その年代の軽度と言われる多くの知的障がいの方々がたどった道を彼女もまた歩いている。誰が悪いとも言い切れないのだが、高度経済成長期は、経済生産性の低い社会的弱者が「役に立たない」という理由で、切り捨てられていった時代である。(今でもそうか…?)

小さい頃に里子に出されている。中学校時代は特殊学級、そして、卒業と同時に都会の繊維関連工場に働きに出る。全寮制である。そこでの過酷な労働とさびしさに心身ともに耐えることができないで、精神が変調を来す。帰郷するが、頑張りきれなかった彼女を受け入れてくれる場所は精神病院にしかなかった。

精神病院の入退院を繰り返すなか、おそらく精神科治療よりも生活リハビリが重要だということになったのだろう。明星学園に入所になっている、20歳代前半のことである。

なんとも切ない成育歴である。

彼女には、ずっと人生の選択肢がない。里子も特殊学級も就職先も精神病院入院も、そして明星学園入所も。

そして、その先の入所施設の暮らしにおいても…。職業訓練も地域移行も…。

今でこそ、時代は意思決定支援などというけれども、この時代、言われたまま、何も文句を言わないでそれに従うことしか人生の道はなく、たとえ「イヤ」と言ってもさらに強い説得や説教が待っているだけだったのだろう。

彼女は、60年もの間「イヤ」という気持ちを心の奥にしまい込んで生きてきたのだった。

そして、もう一つ心の奥にしまい込んだ気持ちは「さびしい」だったのだと思う。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

彼女は度々「私の話を誰も聞いてくれない！」と言って、泣きながら事務室に飛び込んでくることが多くなった。それは一つには支援職員への直接的な文句でもあったし、同僚のH子さんへの嫉妬でもあったのが、いずれの感情の動きも、彼女のエンパワメントを示すものであったので、事務所の職員一同、共感と励ましの視点で彼女を支え続けていた。「さびしかったんだよね」「クラスの職員のところまでいっしょに

行って、話を聞いてくれるように頼もうね」、そんなやりとりがこのところ続いていた。文句を言えるようになったKさん、それを園長にまで告げ口に来ることができるKさん、しかも悪口は、支援職員に向かってである。今までため込んでいた思いが、その出口を探しているようだった。

「H子さんの話はちゃんと聞いているのに私の話は誰も聞いてくれない」そんな訴えに前年度の秋、「幸せノート」なるものを作ることにした。入所以来30年もの間、「できることは自分でしなさい」「職員は忙しいんだからいつでも手伝いなさい」と言われ続けてきたその人の行動特性を変えることはとても難しいことだ。したがって彼女は人にもものを頼むことができない人になっている。

そこで、幸せのノートには、Kさんの一日の願いことが時系列に沿って一覧になっている。その中に「Kさんと話しをする」の一文が加えられていた。

しかし、状況はあまり変わらなかった。彼女の「誰も私の話を聞いてくれない」という訴えは、強くなるばかりだった。支援職員だって、全く話を聞いていないということはないだろうに…。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

この春、その幸せノートの「話しをする」欄には、一つの注意書きが添えられた。必ず一対一で居室の中で話すこと、そしてどんな感情も支持的に受け止めること。

ヒントは、職員のH子さんとの話し方にある。H子さんは車椅子生活で、介助率が高い。したがって職員との話しはどうしても居室の中になる。別に職員にはH子さんを特別扱いにする意図は全くなく、ただの偶然でそうになっているだけなのだが、Kさんにとっての「話しをする」は、ただの立ち話ではなく、「居室の中でする」になっていたのだろう。いくら話しを廊下やフロアでKさんとしていても、これは間違いなく職員にとっては話しをしているわけなのだが、Kさんにとっては話しをしていることにはなっていないのだ。彼女の訴えは、「私の話したい方法で話しを聞いて下さい」だったのだ。

そして、この実践の始まりが4月の下旬、驚くことなかれ、彼女の「私の話しを誰も聞いてくれない！」の訴えは、もう5月の初旬にはぴたりとなくなっている。

居住棟での暮らしも嘘のように穏やかそのものようだ。長く辞めることができなかった職員の業務のお手伝いもすっかり無くなったと聞いている。羨ましさや妬ましさから生じる他者批判もすっかり聞くことが無くなった。つまり、70才を手前にしてすっかり人柄が変わってしまっているらしいのだ。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

「お話しの時間」では、多くのことが語られた。突然退職した大好きな支援職員への怒り、寂しさ、そして、お手伝いが本当はイヤなこと、H子さんの悪口と本当は仲直りをしたくない気持ち…、支援職員はていねいにそれを聞き取った。

彼女の一番欲しかったのは、里子に出されたその時からずっと抱えてきたさびしさを埋める愛着だったのだと思う。妬み、つらみ、怒り…、決して吐いてはいけないう言葉を支援職員の前で吐きだし、それを批判も説教もなく支持的に受け止め続ける支援職員がいたこと、それが彼女を変えたのだった。

人は「あるがまま」を受け入れられることで、変わっていくことができる、そんなカウンセリングの神髄を明星の「お話しの時間」が生み出している。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.cooocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>